書　評

「指標生物――自然をみるものさし」

編集・監修　(財)日本自然保護協会
思索社　355pp　2,000円

布谷知夫（大阪市立自然史博物館）

この本は，（財）日本自然保護協会が編集・監修したもので，協会の理事と普及委員会の委員を中心にして20名をこえる人たちの共同執筆である。また，同協会が同じようにして出版したフィールド・ガイド・シリーズの3冊目として出版されたものである。したがって，タイトルの副題からもわかるように，この本の主な目的は，野外での自然観察で，こんなことに注意すれば，こんなことがわかる，という例を集めた，いわば自然観察のすすめということであろう。同書の「はじめに」にも「本書の基盤はあくまで自然観察，野外活動にあり，指標生物はそのためのひとつの手がかりになることを目的にクローズアップしたものである」とある。また「あとがき」には，「これまでの研究成果」を「一般の方々にお伝えするためにわかりやすく解説することに努めた」「身近な自然の状態を特別な器械を使うことなく，自分たちの手で調べること」をめざしていることが書かれている。したがって，内容も指標生物，あるいは生物指標というものについての，さまざまな問題点や可能性を論じるのではなく，幅の広い分野での研究例が1つの話題について2～4ページほどのスペースで紹介されているというものであり，ある程度，経験のある人や生物分野の研究者にはもの足りない点もあるかもしれない。

目次をみると，「Ⅰ．指標生物とはどんなものか」が，指標生物についての解説であり，自然観察，あるいは自然保護の立場で指標生物を考えるという点で興味深い解説である。「Ⅱ．自然観察を楽しくするための指標生物，Ⅲ．環境の変化を調べるための指標生物，Ⅳ．自然らしさを調べるための指標生物，Ⅴ．資料篇」とつづき，指標生物の例が45例にわたって紹介されている。それぞれの話題については，ごく身近な生物の例で，なるほどと思うものや，こんなことがわかるのかと思うものから，かなり専門的な知識が必要で，なかなかできないなと思うものまで，さまざまであるが，図も多く，わかりやすい解説で，どのページを開いてみても，やってみたいと思わせる魅力がある。またアンケート調査の方法とまとめ方，指標生物のリストなどが載っている点なども，これからやってみようとする人には親切である。そのような意味でこの本は，目的からすれば成功した本ということができるだろう。

また本当にやってみようと計画をはじめる人に対しては，各項目の文末についている文献がありがたい。指標生物の調査は，ある程度のことをやろうと思うと，実際にはなかなか大変なことであるが，文献にあたって予備知識というか，すぐにぶつかるであろう問題点を先に整理しておけば，調査はずっとスムーズにいくであろう。そういう点から言えば，紹介する文献数は，もう少し増やしてもらえばありがたいと思う。

文献といえば，もともとこの本を紹介しようと考えたのは，「資料」に「指標生物参考文献」が29ページにわたって掲載されているのを見て感激したためである。文中に「完全な目録にはほど遠く，重要文献で脱落したものが少なくないであろうことをおことわりしておく」とあるのは当然として，それにしても600に近い文献のリストは貴重なものであり，編者らの苦労はたいへんなものであったろうと想像される。また，これだけ多くの指標生物の例を集め，まとめていくのも大変な仕事であっただろう。

この本は自分の研究のための参考にということにはならないかもしれないが，自然に改めて目を向け，自然を楽しむための本ということで，お勧めしたい。